（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	川本　直美
論文題目	幼子イエスの世話をする：現代メキシコ西部村落におけるカトリック聖像をめぐる宗教実践		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、メキシコ西部ミチョアカン州の一村落におけるカトリックの宗教実践を対象として、聖なる存在と信者との関係において、人々が聖像を「世話する」という日常的な実践のもつ意味を明らかにすることである。

序論では、本論文の目的、理論的背景と視座を述べる。中米を対象とした従来の祭礼研究において、カトリックの聖像は聖なる存在を表象するものとされ、信者と聖像の具体的な関係性についてはほとんど検討されてこなかった。一方、モノと人間の関係を検討した人類学的研究では、モノがいかにして人間に作用（エイジェンシー）を及ぼすのかが分析の対象となってきた。本論文は、これらの人類学的研究を参照し、調査村における幼子イエス（ニーニョ・ディオス、またはニーニョ）像と人々の関係を分析する。

第２章では、１６世紀から始まるスペインによる「魂の征服」（布教）の時代から現在までの、メキシコのカトリック教会が置かれた状況を概観する。また、調査地であるミチョアカン州Ｔ村の地理的・歴史的概要を説明するとともに、住民の生活状況を述べる。

第３章では、ニーニョ・ディオス像に焦点を当てる前に、Ｔ村における住民の宗教実践の概要を述べる。Ｔ村では、個人が受ける秘跡（サクラメント）以外にも、住民が主体となって開催する祭礼が宗教生活の中で重要な位置を占めている。本章の記述を通して、カトリック信徒としての個人的な宗教実践と、共同体レベルの宗教実践の双方が村落社会に生きる人々にとって重要な意味をもつことが明らかになった。また、村落における教会の役割に関する検討を通して、住民は教会を中心とした宗教実践に重きをおく一方、司祭と一部住民との間には、祭祀をめぐってしばしば齟齬や対立が生まれていることがわかった。

第４章では、ニーニョ・ディオス像にまつわる宗教実践を検討する。この検討を通して、自宅においてこの像を祀り、祭礼を主催するとともに、像の日常的な世話と参拝者の歓待を担う世話役（カルゲロ）の役割が明らかになった。また、村落社会においてカルゲロという役職に付随する、「名誉」と「負担」という両義的な側面が明らかになった。

第５章では、ニーニョ・ディオス像をめぐる教会と一部住民の対立を取り上げる。教会におけるニーニョ・ディオス像の永続的な安置を目指す教会側と、世話役が自宅で像を祀るという従来の祭祀方法を堅持したい住民との対立の中で、新たなニーニョ・ディオス像が村に持ち込まれるという事態が生じた。この新たな像を祭祀対象として認めない住民たちの行動の分析を通して、従来のニーニョ・ディオス像が住民にとって代替不可能な存在となっていることが示された。

第６章以降は、人々とニーニョ・ディオス像の関係と親密性の生成について、人々の語りと生活実践に焦点を当てて分析する。第６章では、ニーニョ・ディオス像にまつわる奇跡譚を分析する。この分析を通して、人々が奇跡の経験を語り継ぐことで像の「歴史」を創りだすと同時に、カトリック信者であるというだけでなく、「Ｔ村のニーニョ・ディオス」という無二の存在の信徒となっていく過程が示された。

第７章では、ニーニョ・ディオス像の呼称に関して定量的な分析を行う。この分析を通して、人々が像を呼ぶ名称には多様性があること、また、たとえば祭祀の空間では正式な呼び名が用いられ、寝室などの私的空間では愛称が用いられるというように、特定の呼び名と発話空間が結びついていることが明らかになった。

第８章では、ニーニョ・ディオス像というモノと人々の身体的な関わりを検討する。人々がニーニョ・ディオス像を世話する際に、像と見つめ合う、あるいは像を抱きかかえてあやすといった身体的なやりとりを通して、像の実存性が感じ取られていることがわかった。

第９章では、人々が寝室などの私的な空間において像に対して行う、着替えや寝かしつけをはじめとする日常的な世話の実践を分析する。この中で、たとえばカルゲロの家族が像を着替えさせることに手こずった際に、当人や周囲が「ニーニョが着替えを嫌がっている」と語り合うといった事例にみられるように、日常的な世話の実践を通して像の意志や感情、身体性が看取されていることが示された。

第１０章では、聖像の修復作業に焦点を当てる。文化財の保護を目的とする修復師の実践と、信仰の対象として像の修復にかかわる職人の実践との対比から、無二の聖像でありながら修復されるべきモノでもあるというニーニョ・ディオス像のもつ二面性が示された。

第１１章では、本論文の考察と結論を述べる。本論文は、聖なる存在と信徒との関係について、従来の研究のように教会における儀礼に焦点を当てるのではなく、家庭領域における世話の実践に着眼した事例の分析を行った。ここから、人々とニーニョ・ディオス像との親密な関わり合いを通して、聖像が表象しているとされる「幼子イエス」という教義的な意味が変容し、人々にとって代替不可能な「Ｔ村のニーニョ・ディオス」としての新たな実存性が生成していることが明らかになった。本論文は、日常的かつ身体的な世話を通して像の実存性を感受し、周囲と共有するとともに、像と無二の関係性を築いていく人々の実践と経験を描くことで、聖なるモノと人間の関係を主題とする人類学的議論に新たな視座を提示した。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本申請論文が対象とするのは、現代メキシコの村落部においてカトリックを信仰する人々の宗教実践であるが、なかでも中心となるのはニーニョ・ディオスと呼ばれる幼子イエス・キリストの像(以下、ニーニョ像)をめぐる人々の実践である。計２２ヶ月間にわたる長期のフィールドワークを通して、申請者はこの像に対する人々の日常的な世話の有様と、彼らがこの像に向ける愛情や信仰のあり方を、人々の会話や呼びかけ、ふるまいや語りの事例から詳細に明らかにした。また申請者は、調査村の一部住民とカトリック教会との長きにわたる確執や対立の紆余曲折を描きだすとともに、村落社会におけるニーニョ像の独自性という点からこの対立の構造を分析している。聖なる存在と信徒の関係を主題とする先行研究の多くが教会における儀礼に焦点を当ててきたのに対し、本論文は私的な領域における世話の実践に着眼することで、像がいかにして人々にとって無二の実存性を獲得し、人々に影響を及ぼしているのかを明らかにした。これによって本論文は、聖なるモノをめぐる人類学的研究に新たな視座を提起したと評価できる。

申請者の調査地であるメキシコ西部ミチョアカン州Ｔ村において、ニーニョ像は奇跡を起こす聖像として信仰されているとともに、あたかも人間の乳幼児であるかのように懇ろに「世話」されてもいる。ニーニョ像は実のところ古い木製の人形であるが、人々に多大な影響を与え、彼らの情動や行為を導き出している。こうしたニーニョ像をめぐる人々の実践や関係性を分析するにあたって、申請者が参照するのは文化人類学において人間とモノの関係を考察した先行研究である。なかでも重視されるのは、呪物や芸術作品などのモノが人に及ぼす作用（エイジェンシー）を考察したアルフレッド・ジェルの理論である。ジェルの研究は、モノが社会関係の中に参入することで、いかにして独自の力や作用を発揮することになるのかを検討している。こうした視座は、モノを人間による操作や認識の客体とみなす従来のモノ研究の視点を相対化し、人間とモノの相互行為や、モノを含む社会関係の分析を可能にするものである。

ジェルの理論を参照しつつ、申請者は調査村におけるニーニョ像と人々の関係性の分析を試みる。ただし、ジェルの分析では、神像などのモノは物質であると同時に不可視の原型（プロトタイプ）の表象であり、モノの力はあくまで原型の存在（を推論すること）に依るものとされていた。またジェルの理論では、モノとの関係を通して、ある原型の存在が安定的に推論されることが想定されている。これに対して申請者は、実体と表象という二重性に訴えることなく、人と聖像との双方向的な関係を議論することを試みる。また、像を世話するという身体的で親密なかかわりを通して、人々が「神の子イエス」という定型的な原型のイメージを変容させ、無二の存在としての「村のニーニョ」を顕現させていると述

べる。人とモノとの具体的な相互作用を通して、推論の対象となる原型が変容する可能性を示した点は、本論文の独自性であると評価することができる。

さて、このような人々とニーニョ像との直接的で親密な関わりは、あくまでイエス・キリストの「表象」として聖像を位置づけ、偶像崇拝を禁じるカトリック教会の教義とは相容れず、教会の権威を脅かしかねないものである。申請者の調査によれば、調査村における一部住民と教会との諍いの発端は、住民自身によるニーニョ像の祭祀のあり方を批判する教会側が、住民による祭祀に介入したことにあった。Ｔ村では従来、村の世話役となった信徒夫妻がニーニョ像を一年間自宅に安置して世話し、翌年には別の世話役が自宅で像を祀るという方法で祭祀が行われてきた。これに対して教会は、ニーニョ像が住民の家々を巡回するという従来の祭祀を阻止して、この像を永続的に教会に安置しようとした。このことは、「村のニーニョ」と人々の親密な関わりを断ち切り、あくまで崇高な神の「表象」として位置づけることを意味する。しかしながら村人にとっては、ニーニョ像の安置されている世話役の家を訪問し、私的領域の内で像をあやすといった世話の反復を通して生み出される親密な関係性こそが、ニーニョ像への信仰の礎となっている。教会と住民の対立を村落内のポリティクスだけに還元するのではなく、村人にとっては世話すべき相手であり、教会にとっては神の表象であるというニーニョ像の特質に起因する問題として論じた本論文の分析は、高い説得力をもつ。また、本論文における語りや事例の豊富さと、人々の行為に関する民族誌的記述の厚みは、申請者が現地の言語に精通しているばかりでなく、人々の生活に溶け込み、その親密な生活空間に深く参与しえたという、申請者の人類学者としての資質と能力の高さを示している。

カトリックの聖像を対象とする本論文において、呪物や芸術作品といったモノの作用を論じたジェルの理論をどのように応用すべきかについては、さらなる理論的考察の深化が望まれる。しかしながら、特定のモノとの親密で個別的なかかわりを通して、原型の指標とされるモノが、原型の推論のあり方自体に変化を及ぼしていく過程を仔細に明らかにした申請者の功績は、高く評価されうる。

以上から、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和４年９月６日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日 以降